

はくくむ

虐待などで家庭での居場所を失った少女たちが、共同生活しながら生きる力を付けていく「ステップハウス びあ・かもみーる」が、愛知県春日井市内に開設された。就労や自立をすくなく目指すのではなく、心の傷からの回復が一番の目的。全国的にも珍しい取り組みだ。(野村由美子)

ゆっくり心の傷癒やす

炒めたニラの香りが、台所から居間に広がった。

この日の夕食のメインは「牛肉の韓国風ピカタ」。当番の少女が、スタッフと相談して決めた。他の子たちも手伝い、テーブルにトマトや納豆が並ぶ。「この前、教えてもらった納豆キムチ、おいしかったわー」。スタッフの言葉に、少女は笑みを浮かべた。

二階建ての一軒家で暮らすのは、十代後半の三人と二十代の一人。運営するNPO法人 子どもセンター「パオ」のスタッフが常駐する。

入所者たちは、三食を共にしながら、病院やカウンセリングに通ったり、手芸などを楽しんだりして生活のリズムを整え、社会に出る力を付けようとしている。短期のアルバイトに通う子もいる。少女の一人は「ここで食事や寝る場所がある当たり前の生活ができる。温かくてホッとできる場所。ここに来て、自分で何かを決めたり、夢を見つけて頑張ろうと思え

愛知にステップハウス開設



スタッフ(中央)と食卓を囲む入所の少女たち。食事を皆でとるのも大切な経験だ。愛知県春日井市の「びあ・かもみーる」で

き、パオにたどりついていく。本来の力を出せるようになるまで、支える場所が必要」と話す。

昨年十二月に茨城県つくば市で開かれた日本子ども虐待防止学会でも、全国のシェルター関係者から、保護後の子どもたちの就職や自立の難しさが報告された。

「びあ・かもみーる」運営の原則は「自立をせかさない」こと。県からは、通常は入所者が働きながら寮費を払う「自立援助ホーム」として認可されているが、「働ながら自立を学ぶ」ことを目標に置いてはいない。

「通院などで就職どころではない子もいるし、生活習慣を身に付けることに取り組んでいる子もいる。いわば、自立援助ホームの前段階の施設」とスタッフ。寮費は原則、徴収しておらず、措置費だけでは運営できないため、寄付やボランティアなどの支援も募っている。

虐待を受けた少女ら生活

るようになった」と話す。パオは二〇〇七年、愛知県内にシェルターを開き、性虐待などを受けた少女らを見守り相談など連携して保護してきた。しかし、緊急保護を目的とするシェルターにいられるのは二カ月程度。心身に深い傷を負った少女らは、保護された後も、心身ともに不安定になりやすく、自尊心、コミュニケーション力などの面で問題を抱えている。

「継続的な支援のため、次の居場所が必要」という声が高まり、昨年十一月、寄付金などで開設にこぎ着けた。対等な仲間を意味する「ピア」と、「癒やし」の意味を花言葉に持つカモミールから命名した。

子どもセンター「パオ」は二十一日午後一時半から、名古屋市中区大井町の市女性会館で「子ども「生きる」を支えるために」と題したイベントを開催。歌手の藤田恵美さんのコンサートやタレントの矢野きよ実さんも参加するトークショーがある。無料。☎パオ＝電052(9)314680